

宮内省・宮内庁における古典籍複製事業の沿革とその意義

—コロタイプ印刷による複製を中心として—

小 森 正 明

はじめに

大正一二年（一九二三）九月一日正午頃、関東地方に神奈川県相模湾沖を震源とするマグニチュード七・九の巨大地震が襲った。関東大震災である。この地震は、発生時刻が昼食時でもあったため、台所が火元となって多数の火災が発生し、甚大な被害をもたらしたことはよく知られている。⁽¹⁾

この震災によって古くからわが国に伝えられてきた多くの貴重な古典籍等の文化財も灰燼に帰した。東京帝国大学附属図書館などをはじめとする資料保存機関が甚大な被害を蒙ったのである。⁽²⁾ この災害の教訓として、貴重な古典籍の亡失を防ぎ、後世に伝える手段として複製品を作成し、万一に備えようという動きがひろまっていった。それは原本に忠実な複製を作成し、それを各地で保管することによって危険分散をしようとする発想であった。

特に、震災後の大正末期から昭和初期にかけてこうした事業は活発となった。そこで利用されたのがフランスで発明されドイツにおいて実用化されたコロタイプ印刷という技術である。この技術は、本来写真印刷に用いられたものであったが、のちに述べるようにその特性により複製を作成する手段と

して用いられるようになった。

本稿では、関東大震災を契機として宮内省図書寮で始められ、現在も宮内庁書陵部において継続されている古典籍の複製事業をとりあげ、この事業の沿革とその意義について述べ、今後の事業のあり方についても考えてみたい。

一 宮内省図書寮と関東大震災

ここでは、この複製事業の直接の契機となった関東大震災時における図書寮の状況を概観しておきたい。これについては、既に堀口修氏⁽³⁾によってその大要が明らかにされており、以下の記述は堀口氏の成果に依拠した。

まずは、図書寮の沿革を述べ、大正一二年当時の図書寮の業務や所在地について述べておく。

近代官制下の図書寮は、明治一七年（一八八四）、宮内省に設置された図書寮がその起源である。その職務は、「御系譜並ニ帝室一切ノ記録ヲ編輯シ内外ノ書籍古器物書画ノ保存及ヒ美術ニ関スル事等ヲ掌ル所」とされた。また一時は正倉院や皇室博物館を所管したこともあり、日本文化に大きな影響

を与えてきた皇室文化の調査・研究にも関与するところとなったのである。⁽⁴⁾

明治二年、皇室典範が制定されると、皇室の戸籍にあたる皇統譜及び皇族の誕生等に関する記録の保管が職務として加えられた。そのうち、明治天皇が明治二年に京都御所より移管した約一万点の古典籍をもとに、断絶した宮家や旧公家・大名家、内閣文庫などから献納・移管・購入された古典籍の集積をみて、膨大な古典籍保存機関としての役割も併せもつところとなった。明治期以降、図書寮所蔵古典籍の拡充をみたが、関東大震災までに図書寮に集積されていた古典籍は以下の諸家からのものである。⁽⁵⁾

明治二十四年（一八九一）	内閣文庫（一九三一部）
同 二五年	松岡家（一二〇〇〇点）
同 二九年	徳山毛利家（二〇九〇一点）
同 二九年 三四年	平田家（八二一点）
同 四二年	御所御文庫（二箱）
同 四三年	曾根家（一五〇部）
同 四四年	旧桂宮（九七二〇点）
大正 五年（一九一六）	土御門家（五〇三点）
同 八年	葉室家（四〇〇〇点）
同 八年	野宮家（一四四〇点）
同 一〇年	白川家（一二二八点）

図書寮は、当初赤坂離宮内に設置されたが、いく度か所在地の変遷を経て、大正期には東京市麹町区三年町（現、千代田区霞ヶ関三丁目、永田町一丁目周辺）に所在するところとなっていた。また、関東大震災が発生した大正一

二年当時の図書頭は杉栄三郎であった。図1が、当時の建物の配置図である。図書寮が置かれていた場所は、現在の文部科学省の裏手あたりに該当し、明治期には工部大学校が置かれていた場所であった。

では、次に関東大震災当日の図書寮の状況を簡単にトレースしていこう。既述のように、関東大震災は、正午頃に発生したため、昼食を用意していた台所から火の手が上がり、火災の発生という地震の被害にとどまらない大きな被害をもたらした。

図書寮も例外でなく周辺地域に火災が発生し、類焼の危機に見舞われている。この大震災の折に防火活動に邁進した図書寮職員の一人、両角運右工門の手記が残されている。⁽⁶⁾時間の経過に沿って、状況を記していきたい。

- ・ 九月一日は、土曜日で、職員は昼食を済ませて退庁するものが多かった。
- ・ 第一震が襲来。
- ・ 文庫は東西に雷光のように揺れた。
- ・ 第二震が襲来。

- ・ 警視庁方面から発火し、やがて帝室林野局からも発火した。
- ・ 午後四時頃、図書頭杉孫七郎や事務官が退庁した。
- ・ 午後六時頃、赤坂区田町方面からの火焰が溜池町方面を経て、図書寮の方に向かってきた。

- ・ 当日の図書寮宿直員は、大沢護雄ら六人であったが、非常時のため両角運右工門も臨時宿直員にあてた。

- ・ 午後八時頃、鍋島邸から東京女学館の屋根に飛び火して燃え始めた。
- ・ 両角は、消火活動を行うが、なす術がない状態となり、皇宮警察部消防隊に消火を依頼するが、同隊は宮城方面に急行し、協力を得られなかった。

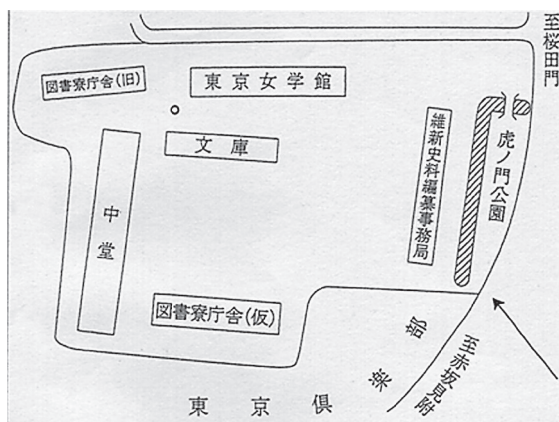


図1 関東大震災当時の図書寮周辺
(堀口論文より転載)

- ・東京女学館の火焔は、竜巻を生じ図書寮を襲う事態となる。
- ・万一に備えて、尚蔵文書の搬出の準備をする。
- ・宿直員達は、消化器と井戸水によって消火活動を行う。
- ・火の勢いは、東京女学館の西側に向かい、図書寮への危険が少なくなる。
- ・しかし、それによって図書寮の旧庁舎への危険が増し、宿直員達は旧庁舎の防火活動を行う。

- ・維新史料編纂事務局の表玄関の真上の庇が燃え始める。
- ・図書寮仮庁舎への延焼を防ぐため、板塀を破壊する。
- ・維新史料編纂事務局が延焼したことによって、東京女学館の火勢が減少し、図書寮旧庁舎への延焼の危険が少なくなる。

- ・旧庁舎への延焼が免れたことにより、仮庁舎への延焼の危険もなくなる。

・午前零時半（九月二日）頃、岩波宮内事務官が本省（宮城）から状況視察のため来部。図書寮の無事が確認される。

こうして、図書寮は宿直員達の奮闘によって、震災の火災から守られた。ほとんど無傷であったことは、奇跡的である。以上のように、図書寮の古典籍は、当時の職員の働きによって震災の被害を免れることができた。しかし、この震災を教訓

として、図書寮に所蔵される貴重な古典籍をどのように守っていくべきかの議論も起こったことであろう。そしてその一つの動きが、より安全な場所をもとめて麹町区三年町から宮城内（皇居）への庁舎移転であった。昭和二年には、宮城内、旧江戸城本丸跡（現在の皇居東御苑内）に新庁舎を建て、平成五年までの長きにわたって古典籍を保存しつづけてきた（図2）。そして平成九年には新しい庁舎が竣工し、現在に至っている。また、後述するように古典籍の複製を作成することも、その教訓へのもう一つの動きとして顕然化する。

二 コロタイプ印刷の工程と複製事業の濫觴

ここでは、まずコロタイプ印刷の特性から述べてみたい。

コロタイプ印刷は、一八五四年にフランスにおいて発明された印刷技術である。日本印刷学会編『新版日本事典』^①には、コロタイプの説明としてまず「ゼラチンを版面とする写真印刷法」とみえる。当初は写真を印刷するための技術であったことがわかる。同事典では、以下、技法を手順ごとに記述し、最後に「発明者ヨセフ＝アルバート（Joseph Albert 独）は一八七〇年ミュンヘン市にコロタイプ工場をつくり、一八七三年にはコロタイプ速刷機を設



図2 昭和2年に竣工した図書寮庁舎
(旧江戸城本丸跡、平成7年 中村一紀氏撮影)

計してコロタイプ印刷の実用化を図った。コロタイプは絵はがき・アルバム・絵画・写真印画などの印刷に用いる。発明者の名にちなみ別名アルバータイプともいう。また、アメリカではフォトゼラチンプロセスとも呼ぶ。」と記されている。

この記述には多少の注釈が必要である。文中の「発明者ヨセフ・アルバー」とあるが彼はドイツ人で、厳密にはコロタイプ印刷専用の印刷機を発明し実用化した人物である。それ故事典では発明者とされたのであろう。一八五四年にフランスでこの技術を最初に発明したのは、ポアテバン (Poitevin) という人物であるという⁽⁸⁾。我が国には、明治時代にその技術が輸入され、明治一六年、内閣印刷局においてコロタイプによる印刷が開始され、当時は主として写真印刷に使用されていた⁽⁹⁾。版にガラス板を使用するところから、その古名を冠して玻璃版(はりばん)とよばれる場合もある。

その大きな特徴は、絵画・写真などを印刷する場合に主流であった網点で画像を表現する印刷とは異なり、連続階調(網点無し)で画像を表現できるため、写真や絵画などの微妙なタッチを忠実に再現できるという点にある。のちに美術品などの複製に用いられるようになった所以である。

古典籍の複製に、いつ頃からこのコロタイプ印刷が用い始められたのかは、定かではないが、既に大正二、三年にかけて『類聚古集』一六帖の複製がコロタイプ印刷で行われている⁽¹⁰⁾。『類聚古集』は、『万葉集』の和歌を項目別に分類・編集して作られたもので、平安時代の学識者・歌人としても知られる藤原敦隆(一一二〇没)の編。本書は一二世紀、平安後期の書写と考えられ、現在国宝に指定。龍谷大学に所蔵される⁽¹¹⁾。

もともとコロタイプ印刷は、写真印刷の技術として発明されたため、古典

籍などの複製に応用されていたのであろう。大正期、特に関東大震災以降、古典籍複製にコロタイプ印刷が多用されていくようになり、後述するように主として民間における複製事業にこの技術が応用され、古典籍の複製は、コロタイプ印刷による時代が長く続くようになる。

以下、その工程について概略を述べておきたい⁽¹²⁾。

① 撮影 従来は大型カメラを使用し、対象物の原寸大写真を撮影する。色分解をするため、四色(赤、緑、黄、紫)のフィルターをかけ、それぞれの色別の画像を撮影する。当然、使用するフィルムは原寸に対応できる大判のフィルムである。近年は技術の進歩によって、高精細のデジタルカメラによる撮影でも再現が可能となっており、コストや利便性などの面で期待できる状況になりつつある。

② 製版 分解撮影により赤・青・黄・墨の各色がとり出されたフィルムから、更に必要な部分を分けていく作業。分解撮影されたフィルムには、厳密には使用するための色以外の部分も少しではあるが写り込んでおり、それらを取り除いていく作業が必要である。つまり、この作業によって厳密な刷版用のデータを区分けしていく。実際には、フィルム部分のうち必要な部分を鉛筆でトレースしておき、不必要な部分をマスキングする作業を四色分それぞれ行う。

③ 刷版の制作 コロタイプ印刷の最大の特徴は、ドット(網点)を用いない点であり、ゼラチン版を使用することによって階調表現が可能となることである。厚いガラス板にゼラチンを主原料とする液剤を均等に塗布し、乾燥させたのち、製版のフィルムを密着させて、紫外線を照射すると光があたった部分のみ凸になる。その部分が刷版となる。

④ 印刷 刷版をもとに、印刷の工程にはいる。印刷は墨色の版を基本とし、徐々に色版を重ねていく作業となる。つまり一カットを必要な色分だけ重ね刷りして仕上げていく。この際に使用されるインキは、顔料が六〇パーセント程度含んだ特殊なものを使用する。顔料の原料は鉱物などの天然素材で、日本画に使用される岩絵具と同じものである。こうしたインキを使用することによって、油脂分の多い化学染料よりも長い耐久性をもつようになる。刷りの工程では、原本の色合いや雰囲気を出すため、何度かの色校正を行う。これは、試験的に印刷したものを原本と比較し、色などの微調整をはかっていく作業である。こうした色校正を経たのち、それらのデータを総合し本印刷に入り、一つの作品を仕上げていく。印刷も一枚ごとに手差しで行い、色の重ね刷りに際して、微妙なずれが起きないように慎重に行う。紙数が多く、一枚ごとの風合いが異なるような古典籍の場合は、それぞれについて色校正を行うこともあり、より手間を要する。因みに、印刷に使用する用紙は、楮や三桮などを主原料とする和紙を使用し、経年に堪えるようにしている。

⑤ 仕立 印刷がおわったものは、原本と同じ体裁にするため、専門の技術者が仕立てを行う。

以上が、コロタイプ印刷による複製作成の主な工程である。原本を原寸大で撮影するのは、原本のもつすべての情報を一旦写真にし、その写真の画像を忠実に再現するために行う重要な作業である。また、材料もそのほとんどが特注品を使用し、長い年月の経過に十分耐えうるようにしているのがコロタイプ複製の大きな特徴で、それ故に将来にわたって長く伝えることができる媒体として優れている。

三 図書寮における複製事業の開始

図書寮における複製事業が関東大震災が契機となつていくことは、既述の通りである。その事業は、震災の復興も一定程度進んだ昭和五年（一九三〇）に企画された。昭和五年頃にこの事業が企画されたのは、決して偶然ではなからう。一般的には昭和五年頃を区切りとして震災復興が完了したという認識があつたためである。¹³ 実は、大正末期から昭和初期にかけて、民間では同様な古典籍複製事業が開始されていた。古典保存会と財団法人前田育徳会尊経閣文庫の活動がそれである。

前者の古典保存会は、国語学者として知られる山田孝雄¹⁴を中心として設立された組織で、関東大震災の翌年の大正一三年には、真福寺本『古事記』を複製・刊行し、以降昭和一八年まで、八一種九六六の古典籍の複製事業を行った。これを「古典保存会複製書」という。¹⁵

後者の尊経閣文庫は、加賀前田家収集の古典籍などを所蔵している特殊文庫で、現在国宝・重要文化財を多数所蔵する機関として知られている。¹⁶ 尊経閣文庫も先の関東大震災の被害状況から、古典籍複製事業の必要性を痛感したようで、当時の前田家主前田利為が刊行を発意したとされる。その事業は、大正一五年から昭和二七年の長きにわたって行われ、現在重要文化財に指定されている金沢文庫旧蔵の『古語拾遺』をはじめとして『建治三年記』にいたるまで、貴重な古典籍六七種一七九点が刊行された。これを「尊経閣叢刊」という。¹⁷

この時期のコロタイプ印刷は、ほとんどが墨色の単色刷で、形態も原本そ

のままというよりは袋綴じの冊子体に置き換えて出版されるのがほとんどであったが、尊経閣叢刊は、形態も原本そのままの形とし、単色刷ではあるがより原本の雰囲気を出すようにしている点でも高く評価できる事業であった。こうした民間の活動の活発化を契機とし、図書寮においても同様の事業を志向していったと推測される。そして、この事業は、当時の皇室の文化事業の一つとして位置づけられると考えられる。

図書寮における事業の最初の複製対象に選ばれたのが、『看聞御記』四四卷⁽¹⁸⁾である(複製は四三卷)。「看聞御記」は、伏見宮第三代貞成親王(一三七二―一四五六)御自筆の日記で、その日記の期間は、応永二十三年(一四一六)から宝徳四年(一四五二)にいたるおよそ三六年の長きにわたる。室町時代を代表する日記の一つとして数えられ、巷間の事件にいたるまで親王がまさに看(み)、聞(き)きした事柄を記したものの。生前御自身によって『看聞日記』と名付けられており、現在の通行書名は『看聞日記』を採用している(この事業では『看聞御記』の名称を使用しており、混乱を避けるために本稿でもこの名称を使用する)。太巻きの卷子本、四四巻にも及ぶ大部な日記であるが、複製対象の嚆矢として本記が選定されたのは、当時の図書寮職員の慧眼といえるであろう。

時の経緯をまとめた特定歴史公文書『自昭和五年／至同十八年』貴重書影本〈看聞／日記〉刊行予定⁽¹⁹⁾に、事業開始にあたり宮内大臣の決裁文書の控えが残されているが、事業の意義を次のように記している。長文ではあるが以下全文を掲げる。(〽)は小書・割書等)

「大震災災ノ為貴重ナル多大ノ典籍ヲ亡滅シタルト近時ノ学問及思想ノ趣向トニヨリ、現代ノ文化事業トシテ古典珍籍ノ複製刊行カ名門富豪ノ篤志ニ

ヨリ、或ハ學術協会ニヨリ広ク行ハル、ニ至リシハ、学界乃至思想界ノ為祝福ニ堪ヘサル所ナリ、此ノ時ニ当リ、和漢古文獻ノ襲蔵ニ於テ比類ナキ富庫ヲ擁スル図書寮ニ於テモ複製刊行ノ事業ヲ開始スルハ極メテ有意義ニシテ、又当然ノ処置ナリト信ス、其複本作製ヲ要スヘキモノハ先ツ貴重図書御物甲種図書ヲ通シ、優ニ五拾種程ニ上リ、其ノ内手頃ノモノニ在リテハ、世間的ニ之カ刊行ヲ出願シ来ルモノモ亦之アルヘキモ、分量並ニ經費ニ於テ相当巨額ニ上ルモノニ至リテハ到底世間的ニ刊行ヲ期待シ得サルハ、火ヲ観ルヨリモ明カナリ、若シ此等ノモノニ付、当寮ニ於テ原版同様ノ複本ヲ作製センカ、原本ハ之ヲ保蔵シ一般ノ利用ニハ複本ヲ用ユルヲ得ルヲ以テ、原本ヲ永久ニ保存スルコトヲ得ヘク、且長ク世上ニ存続セシメ得ルノモナラス学界ヲ裨益スルトコロ尠少ニアラサルナリ、其ノ複製影本ニ付テハ、当寮ニ於テ百部ヲ引受ケ、其ノ所要經費ヲ負担シ、余部ハ篤志希望者ニ頒布スルコトヲ許ス様計畫致度、仍テ第一着手トシテ後崇光院太上天皇宸筆看聞御記四拾四軸ヲ選定候間、別紙所要經費明細書記載ノ通、予算総額約拾万円ヲ以テ五ヶ年乃至十ヶ年継続事業トシテ来ル昭和六年度以降毎年度予算計上相成様致度、此段仰高裁、追而本件經費ハ事業ノ性質上毎年度予算額ヲ後年度ニ繰越シ使用シ得ル様致度、」

以上の趣旨によれば、民間の事業も意識しつつ、民間ではなしえないような大部な貴重古典籍の複製を志向していることがわかる。当時の民間の事業は、一回の刊行で原本の形態が冊子本数冊か、卷子巻数巻程度の刊行が一般的であった。決裁文書に付けられた刊行予定書目は、以下の通りである。

『看聞御記』	御筆(後崇光院)	四四軸	二三〇九枚
『古今和歌集』	御筆(後柏原院)	一冊	一五九枚

『古今和歌集 上』	古写(寂恵筆)	一冊	一一七枚	『史記范雎蔡沢列伝』	古写	平安	一軸	四一枚
『通典』	宋版	四四冊	二二〇三枚	『七経孟子孝文並補遺』	写	享保一一	六四冊	三〇二一枚
『太平御覧』	同	一一四冊	八三九三枚	物茂卿序(山井重晰題識)				
『文選』	同	六一冊	三〇〇一枚	『古文孝経』	古写(清原良賢筆)	鎌倉	一軸	四五枚
『論衡』	同	一二冊	四八九枚	『孝経』	宋版		一冊	八枚
『誠齋集』	同	四三冊	二九五六枚	『文中子中説』	宋版		二冊	五六枚
『群書治要』	古写	四七軸	一七七四枚	『元亨釈書』	正平版(初度)		三一帖	八五二枚
『文館詞林』(裏面法華要録)	唐抄本	一軸	一三枚	『呂氏家塾説詩記』	宋版		九冊	六〇七枚
『春秋経伝集解 付経伝識異』	宋版	一五冊	一〇五一枚	『満文輯韻 付散語解』	高橋景保		二一冊	一一一九枚
『春秋経伝集解 上』	古写・古点	三〇軸	一七一一枚	『増訂満文輯韻』	写	高橋景保	一一冊	五三四枚
『尚書正義』	宋版	一七冊	五一一枚	『前漢書』	宋版		四三冊	二四六二枚
『論語注疏』	同	一〇冊	二七〇枚	『後漢書』	宋版(元歟)		三五冊	二四一枚
『集韻』	同	九冊	四一六枚	『初学記』	宋版		一〇冊	四八五枚
『太平寰宇記』	同	二五冊	七九七枚	『画一元亀』	宋版		一八冊	七二五枚
『世説新語』	同	三冊	二九四枚	『医説』	宋版		二冊	七五枚
『宋景文集』	同	六冊	一八二枚	『雲林神殻』	慶長	活字板	一冊	一四三枚
『寒山詩集』	同	一帖	九一枚	『魏氏家藏方』	宋版		一一冊	四〇三枚
『崔舍人玉堂藁西垣類藁』	同	七冊一帖	三〇二枚	『王文公文集』	宋版		一四冊	八七八枚
以上貴重図書				『東坡集』	宋版		一七冊	九六八枚
『左承抄』	古写	八冊	三五四枚	『文鏡秘府論』	古写	平安	六冊	二四七枚
『儀礼疏』	古写	平安	七九枚	『四分律音義』	古写	平安	一軸	一七枚
『本朝文粹』	古写	平安	三九枚	『三国志』	宋版		二五冊	一三七二枚
『春記』	古写(藤原資房筆)	平安	八軸	『下学集』	古写	足利	二冊	八八枚

『禪林寺古文書』	古写	平安	一軸	二〇枚
『勝鬘宝屈』	古写	唐抄本	一冊	二九枚
『拾遺和歌集』	古写	足利（東常縁筆）	一冊	一七三枚
『後撰和歌集』	古写	足利（東常縁筆）	一冊	二二五枚
以上御物甲種図書		三〇三冊 一三軸	三二帖	一七八二七枚
合計		六七一冊 一三五軸	三四帖	四四八六六枚
外二『水左記（裏面共）』	古写	平安（源俊房筆）	二軸	一〇八枚

（裏面記録若干）

下段にみえる枚数は、それぞれの古典籍の紙数（丁数等）と考えられ、これがコロタイプ複製の刷版の数量となり、見積の基礎となったようである。

これらの書目を一覧すれば、当時の図書寮は大部で相当の費用を要するものでもその貴重性を考慮し、事業を行おうとしていた覚悟が読み取れる。また、書写本のような唯一無二のものだけでなく、中国から将来された版本類、なかでも宋版なども書目に加えている点は注目されよう。しかし、結局戦前においては、このうちの『看聞御記』・『群書治要』二件の複製のみが実現したにすぎなかったが、それでもこの大部な二件の複製実現は高く評価できる。

さて、この事業の企画において、『看聞御記』複製の実施業者として京都市の便利堂印刷所主中村竹四郎が選任された。便利堂は、明治二〇年（一八八七）に中村弥二郎が貸本屋を開業したことに始まるが、翌年に出版部門を併設し、印刷業にも参入していった。やがて明治三八年にはコロタイプ印刷工場を新設して、主として京都市内の神社・仏閣などの絵はがきの印刷・刊行を手がけるようになる。⁽²⁰⁾

こうした技術が次第に認められ、関東大震災後の大正一五年（一九二六）

から昭和二年にかけて、大阪毎日新聞社企画・刊行の『（秘籍大観）古写本日本書紀』八帖・七巻のコロタイプ印刷による複製事業を請負、刊行した。この事業によって便利堂は、古典籍の複製手段としてのコロタイプ印刷を確立していったといえよう。ちなみにこの企画において、図書寮所蔵の『日本書紀』八帖もコロタイプ複製として刊行されている。⁽²¹⁾

このようなコロタイプ印刷による古典籍複製事業は、昭和三年に便利堂を事務局として貴重図書影本刊行会が設立され組織化された。⁽²²⁾ その代表者は、国語学の碩学新村出であった。同年発行と推測される『（貴重図書）影本刊行会（主旨規定配本目録）』⁽²³⁾ には、刊行会趣意書、規定、発起人・賛助員・幹事の名前、第一期複製並に配本書目、第二期以下影本予定目録、影本方針及び頒布規約が掲載されている。

その趣意書には「往々亡逸の不幸に遇つて再びその片影も見ることが出来なくなる憂があり」とあり、亡失に備えるために複製事業を組織したことを謳っている。発起人には、高木利太・内藤虎次郎（湖南）・黒板勝美・新村出など、当時の財界や日本史学界・東洋史学界・国語史学界の錚々たる碩学の名を連ねていた。また、第一期の複製・配本書目は『承德本古謡集』をはじめとする一〇種の図書が掲げられている。⁽²⁴⁾

これに関して、同じく『（自昭和五年／至同十八年）貴重書影本（看聞日記）刊行予定』に、「右事業経費二付、今般予定価格七万九千六百拾貳円八拾銭ヲ以テ印刷請負ニ附シ度処、五千元以上ノ請負ニ付御認可可相得度会計処務規定第三百三十八条ニ依リ此段上請候也、

追而本件看聞御記刊行ニ関シ、別紙添付書類ノ通り在京智恩院内貴重書影本刊行会代表新村出ヨリ出願ノ儀有之候処、同刊行会ハ此ノ種ノ会トシテ現

在最モ信賴ニ足ル人士ノ發起ニ成リタルモノニ候ヘハ、本寮影本作製ノ序ヲ以テ、同會員及篤志者ニ対シ、実費頒布方ヲ許可スルハ、出版ノ趣旨ニモ適ヒ、寧ロ望マシキ次第ト相認メ候条、左様取計ヒ致度併セテ相伺候也、尚ホ又本事業請負契約ハ、皇室會計第七十八条第一項第十四号ニ拠リ前記刊行会印刷担当者タル京都市便利堂印刷所主中村竹四郎ト随意契約締結可致見込ニ候、」とあり、『看聞御記』の複製事業を同会に委託し、その作製に關しては便利堂と随意契約を締結している。

『看聞御記』の複製は、単年度で行うには大規模な事業であるところから、昭和六年から同一〇年までの五ヶ年をかけた継続事業として実施しようとする計画であつた。このほか、先の公文書の簿冊中には、翌昭和六年一月二〇日付けの同会代表・新村出の「看聞御記影本刊行ニ就テノ御願案」も所収されている。当時の図書寮は、この刊行会の活動によつて同会に『看聞御記』の複製を委託するとともに、増刷を許可し刊行会の會員に頒布する形式を選んだのである。こうして開始された複製事業は、予定通り昭和一〇年に至つて完成をみた。これらは、当時の各宮家、宮内省管轄の学習院などの教育機関、官立の研究機関、東京帝国大学などの各大学、東洋文庫などの図書館に寄贈され、活用を期待されたのである。⁽²⁵⁾

その後、昭和十一年から六ヶ年をかけ、鎌倉時代の書写で金沢文庫旧蔵の『群書治要』四七巻の複製事業が開始され、同一六年に完成した。本書は、先に紹介した刊行予定書目にも所収されている。同書は徳川家康遺愛の古典籍で、かつて江戸幕府の紅葉山文庫に所蔵され、明治維新とともに新政府の内閣文庫に接収、やがて明治二十四年に図書寮に移管されたものであつた。

本書は、唐の太宗の命により唐・貞觀五年（六三一）に、魏徵が中心とな

り統治の基本理念を諸書より抜粹し編纂したものである。本書は、既に宋の時代に中国本土では失われており、その意味でも貴重な古典籍であつた。これも『看聞御記』同様に原本通りの卷子本の形で複製した。また、同書には訓を示すために多数の朱点が付けられているが、これは木版を新たに起こし朱色で印刷している。この時の複製事業は、便利堂・七條憲三・大塚巧芸社・審美書院の四社での見積合わせの結果、大塚巧芸社が請け負っている。⁽²⁶⁾

以上、戦前の図書寮において実施された古典籍複製事業『看聞御記』・『群書治要』の二つを概観したが、ともに翻刻文を付した点は、大きな特徴といえる。この事業は図書寮所蔵本の万一の亡失に備えるためだけでなく、一般への利用普及を図ることをも目的としたからである。こうした伝統は現在の事業にも継承され、戦後の複製事業においても、複製対象に関する書誌情報と翻刻文とを併せ所収した解題を付し刊行を行っている。

四 戦後の事業継承とその意義

昭和六年より開始された図書寮における古典籍複製事業は、昭和二〇年の終戦時には、『看聞御記』・『群書治要』の二件のみの実施にとどまっていた。それでもこの二件の事業が完遂されたことは、画期的で高く評価できる。

図書寮においては、昭和一五年頃から、その安全を図るため古典籍等の疎開に向けての準備が始まっていた。一般的には、昭和一九年頃から激化しつつある本土への空襲を契機として文化財疎開の動きがみられるようになるが、図書寮や皇室博物館では、皇室財産の保全という観点から、比較的早い時期からこうした動きをみせるようになる。⁽²⁷⁾『群書治要』の複製が昭和一六年に

完了すると、その配布事務は同一九年頃まで続いている。そして昭和一九年頃から本土への空襲が激化し始めると、複製事業そのものが遂行不可能となっていた。既に図書寮は、昭和一八年七月に、戦争終結まで複製事業の一時中止を決定していた。⁽²⁸⁾

しかし、昭和二〇年の終戦の年、図書寮は、早くもコロタイプ印刷による複製事業を復活させている。それが『中右記』一巻の複製・刊行であった。同書に付された奥付には、次のようにある。

昭和二十年十二月十五日印刷 宮内省図書寮善本叢刊第二

昭和二十年十二月三十日発行 「中右記」 価六拾円

編纂者 宮内省図書寮

印刷者 京都市中京区新町通竹屋町下ル

株式会社便利堂（京都一一六） 代表者 佐藤浜次郎

発行者 東京都麹町区有楽町一ノ四

株式会社美術書院 代表者 中村竹四郎

発行所 東京都麹町区有楽町一ノ四 株式会社 美術書院

複製対象となった『中右記』⁽²⁹⁾は、平安時代の公卿中御門宗忠の日記で、右大臣等を歴任したところから家号の一字の「中」と右大臣の「右」とをとり『中右記』と称されている。本書には、流布本にはない天仁二年（一一〇九）一〇月の熊野参詣に関する記事があり、また鎌倉時代の書写と推定されるもの。図書寮以前の旧蔵者は、江戸時代後期の公卿柳原紀光である。

ここで注目したいのは、昭和二〇年という年次だけではなく、「宮内省図書寮善本叢刊二」という表記である。戦前に刊行された『看聞御記』及び『群書治要』には、こうした名称は付けられておらず、戦後すぐに刊行され

た『中右記』がその「第二」であることは、今もって謎である。あるいは、戦後はじめての企画であり、戦前の事業を「第一」ととらえ、第二期の刊行という程度の意味で使用しているのであろうか。後考を俟ちたい。⁽³⁰⁾発行所の美術書院は、昭和一九年に設立された出版社で、戦時中の措置により印刷と出版との兼業ができなくなったために、便利堂が出版部門として東京に設立した会社である。⁽³¹⁾しかし、この複製に関する資料は残っておらず、その詳しい経緯はわからない。恐らくは、前年の昭和一九年あたりから作業を進めていなければ実行は難しいと推測されるが、もし終戦からわずか四ヶ月で刊行できたならば、驚異的なことである。既述のように、図書寮では昭和一八年の七月に事業の一時中止を決定しているからである。

これを契機として、昭和二二年度には、靈元天皇宸筆の『麓木鈔 上』一冊の複製を刊行した。刊行された複製全体については、稿末の「図書寮・書陵部 コロタイプ複製一覧」を参照されたい。そして昭和二四年の官制改革により、宮内府（宮内省は、昭和二二年に宮内府となった）は宮内庁となり、図書寮は、諸陵寮の機能を吸収し、書陵部となった。それ故、昭和二四年度以降の事業は、書陵部の事業となったのである。

ところで、昭和三〇年代から四〇年代にかけて、コロタイプ複製の技術は大きな変革の時期を迎えることとなる。それが、多色刷り技術の開発である。既述のように日本にコロタイプの技術が輸入された明治時代以降、それは墨色一色の印刷であった。戦前に刊行されたコロタイプ複製は墨色の単色刷りである。それが、便利堂の技術開発によって多色刷りのコロタイプ印刷が可能となったのである。これをカラーコロタイプと称する。

当部が製作したものでは、昭和三八年度に刊行した『琵琶譜』一巻が

最初であった。『琵琶譜』は、一一世紀に書写された琵琶の調絃に関する事項や、調の種類などを集成したもので、一紙ごとに様々な色紙を使用しており、単色での刊行ではその意義を失うため、カラーコロタイプによって複製されたのである。その後は、『天子撰関御影』⁽³²⁾の「天子部」や、平安時代の装飾料紙の特徴の一つである飛雲を有する『源経信筆 琵琶譜』などいくつかをカラーコロタイプで製作した。これらは、原本と同等の再現力を持ち、原本の代替品としての役割も十分果たしうると考える。平成三年度からは、今上陛下の御即位を記念し、花園天皇の宸筆・宸記（天皇の日記）『花園院宸記』⁽³³⁾全三五巻のカラーコロタイプによる複製事業を二四カ年計画で開始し、平成二六年度で完結する。

以上、戦後の図書寮から書陵部へと受け継がれてきた古典籍のコロタイプ印刷による複製事業の概略をみてきたが、次にこうした複製事業の意義について考えてみたい。

既述のように、宮内省・宮内庁における古典籍の複製事業は、関東震災の被害を教訓として開始された事業であった。幸いなことに、図書寮所蔵の古典籍は、職員の働きによってこの大震災の被害をうけることはなかった。また、昭和時代の戦時中も職員の努力によって古典籍の疎開が行われ、ほんの一部を除いて亡失することなく戦後に引き継がれることとなった。

平成二三年三月一日の東日本大震災は、人的にも物的にも近年にない大きな災害となってしまった。特に文化財に関しては、所蔵機関である博物館・美術館・図書館などの施設や個人所有のものも甚大な被害をうけたことは周知のところであり、こうした文化財の救援を行う「文化財レスキュー」⁽³⁴⁾の活動も各地で活発化し、大きな成果をあげている。こうした状況の中で、

特に古典籍や古文書などは、災害前に撮影されたマイクロフィルムがろうじて残り、原本が亡失してしまった現在、代替えとしてマイクロフィルムが貴重な存在となっている例があることは、しばしば聞かれるところである。⁽³⁵⁾つまり、文化財そのものが失われても、複製品によって内容は伝えられている場合がある。

現代社会にあつては、文化財の情報を伝えるための媒体として、デジタルをはじめ様々なものが考え出されているが、その歴史はまだ浅く、果たして長期にわたって伝えていけるものなのかどうかは未知数である。デジタルとアナログは、それぞれに一長一短があり、むしろそれぞれの特性を生かして利用すべきかと思うが、歴史的にみればいまだ紙媒体などのアナログのほうが、勝っていることは明らかである。その代表が、コロタイプ印刷による複製品で、少なくとも明治時代以降の約一〇〇年余の歴史と実績とがあり、当時和紙に印刷されたコロタイプ印刷による複製品は、現在に至るまで酸性紙問題などには無縁である。⁽³⁶⁾

私たちは、媒体の特性を熟知しながらそれを使い分けていけばよいのであるが、こと古典籍などの複製に関しては、紙媒体を主とすべきで、それを補うものとしてデジタルを利用していくべきであると考える。その代表的な存在が、いままで述べてきたコロタイプ印刷による複製品の製作である。災害は、いつ起きるかわからないが、文化財を未来に伝えていくことをその職務の一つとする私たちは、常にそのリスクとを考えていかなければならない。そして、その重要な役割を担うのが複製品であるといえるのである。

おわりに

以上、宮内省以来、継続してきたコロタイプ印刷による古典籍複製事業の沿革と、その意義について述べてきた。

平成二三年、事業を見直し点検するという意図から、コロタイプ複製（現在は、『花園宸記』の複製）を寄贈している諸機関に対してアンケート調査を行った。そして、寄贈先の約七〇パーセントの機関等から回答を得ることができた。その成果に基づく総括は、以下の通りである。

1 本複製品の配架場所については、各機関貴重書架（書庫）・和装図書書架などが多く、本複製品を貴重書や和装本と同じように扱っている機関が多い。これは本複製品が原装通りに複製（卷子本）されているためであろう。しかし、一部の機関では一般書架に配置されており、一般図書と同様に利用されることを想定している場合もある。概ね貴重な資料として特別の扱いをしている。

2 利用状況については、詳細に年次を追っての把握をしている例は少ない。これは、本複製品が貴重書庫内などでの閲覧に限定し、また一般図書と同様にバーコード貼付がされないために貸出しの履歴が残りにくいためでもある。しかし、大学で行っている日本史関係・書誌学関係の講義や、日本の図書の参考資料として利用している例は多い。当然のことながら一般閲覧の履歴を残している機関もある。また、学術誌に本複製品を利用した研究成果が報告されるなど学術利用も確実に行われている。⁽³⁷⁾

3 本複製品は、カラーコロタイプ印刷による精巧な複製であるため、写真

などに比してより多くの正確な情報を提供できるというメリットがある。また卷子本という原装通りの複製であり、書誌学の参考資料としての活用もされている。こうした点から、ほとんどの機関から継続的な寄贈が要望されている。

このようにみえてくると、本事業の意義が当部所蔵古典籍の学術利用の普及と、災害などによる原本亡失に備えるための危険分散である点であることを各機関は理解しつつ、一般利用にも供し、確実に保管できる体制もとっており、当部が期待するような成果をあげていると結論できる。阪神・淡路大震災や東日本大震災における文化財への被害を想起する時、以上のような複製事業は、是非とも必要である。今後の事業継続が求められる所以である。

（註）

- （1） 関東大震災の被害状況全般については、内務省社会局編・刊の『大正震災誌 上・下』（大正一四年）に詳しい。
- （2） 北原糸子氏「関東大震災と文化財」（『自然災害科学』二八一、平成二一年）では、史蹟などを対象として震災の被害について論じている。また『大正大震災災誌』（改造社、大正一三年）には、「名蹟と文献の喪失」の項目があり「帝都古美術品罹災誌」と題して美術品の被害状況が記されている。このほか『東京大学百年史 部局編四』（第二十六編 附属図書館）（東京大学出版会、昭和六二年）は、関東大震災における被害状況についての記述が、東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』（昭和四八年）「第四章 関東大震災と復興博物館の建設」には、当時の博物館の被害状況について記述がある。震災当時の状況については、「座談会 図書寮と帝室博物館の思い出―杉栄三郎博士を囲んで―」（『日本歴史』一九五、昭和三九年）があり、当時図書頭であった杉栄三郎氏を囲んでの座談会記録がある。この座談会では、杉栄三郎のほか、桃裕行、児玉幸多、和田軍一、

矢島恭介、田中健夫の諸氏が出席され、大久保利謙氏が司会を務めている。また、昭和天皇記念館・宮内庁宮内公文書館共催展示図録『摂政宮と関東大震災 宮内庁の記録から』（宮内庁書陵部図書課宮内公文書館、平成二五年）「第四章 宮内省の動向」においても、関東大震災時の図書寮の状況について簡略に述べられている。

(3) 「関東大震災と図書寮」（『古文書研究』六七号、平成二二年）。のち、同氏『宮内省の公文書類と図書に関する基礎的研究』（創泉堂出版、二三年）に、加筆・訂正の上再所収。

(4) 小川省三氏「書陵部官制の変遷」（『書陵部紀要』一号、昭和二六年）、宮間純一氏「宮内省・宮内府・宮内庁の組織に関する基礎的研究 一 図書寮・書陵部における官制・事務分掌の歴史の変遷」（『書陵部紀要』六四号、平成二五年）など。

(5) 伊地知鐵男氏「蔵書史と新収書解説」（『書陵部紀要』一号、昭和二六年）。

(6) 宮内公文書館所蔵『自大正十年至昭和五年図書寮 重要雑録』一冊（識別番号24185）に所収されている。

(7) 日本印刷学会編、大蔵省印刷局刊（昭和四九年初刷、同五七年第五刷）。

(8) 便利堂発行『便利堂コロタイプ工房 永遠のさがけであるということ』は、会社案内のパンレットであるが、コロタイプ印刷に至る工程など、写真入りで丁寧な解説がされており、コロタイプ印刷の概要と特徴などを知るには便利な入門書としての役割を果たしている。

(9) 山本修氏「文化財保存に資するコロタイプ技術と今後の課題」（彬子女王編『文化財の現在 過去・未来』宮帯出版社、平成二五年）。

(10) 大正三年当時の印刷・発行元は、東京市赤坂区所在の煥文堂という印刷業者で、代表は弓山静身とある。また、明治時代以降のコロタイプ印刷による複製図書についてその全体像や、その嚆矢がいつ頃、何を対象とされたのかなどの諸問題を把握することは難しいが、古書肆が発行している古書目録の記載が参考となる。一誠堂書店『一誠堂古書目録』、小林書房『新収古書目録集』などには、複

製本が掲載されている項目を備えている。

(11) 『類聚古集』（下坂守氏執筆）（『週刊朝日百科 日本の国宝64 京都／東本願寺 西本願寺 龍谷大学』（朝日新聞社、平成二〇年）所収）。

(12) 註（8）前掲、便利堂発行『便利堂コロタイプ工房 永遠のさがけであるということ』及び山本修氏註（9）前掲論文。

(13) 帝都復興事業が、大正一三年から昭和五年にかけて実施されたことは、越茶明『東京都市計画物語』（筑摩書房、平成一三年）でも述べられている。

(14) 「山田孝雄」については、築島裕氏執筆の『国史大辞典 第一四卷』（吉川弘文館、平成五年）の該当項目を参照。

(15) 「古典保存会複製書」については、太田晶二郎氏執筆の『国史大辞典 第五卷』（吉川弘文館、昭和五九年）の該当項目を参照。

(16) 「尊経閣文庫」の概要やその活動については、飯田瑞穂氏執筆の『国史大辞典 第九卷』（吉川弘文館、昭和六二年）の該当項目を参照。

(17) 「尊経閣叢刊」については、飯田瑞穂氏執筆の『国史大辞典 第九卷』（吉川弘文館、昭和六二年）の該当項目を参照。

(18) 図書寮文庫保管の『看聞日記』は全四四卷（函号、特一〇七）であるが、このうち一卷は、旧表紙などをまとめたもので、複製は行われなかった。それ故四三卷となる。

(19) 宮内公文書館所蔵、一冊、第一号文書。識別番号63589。

(20) 便利堂『便利堂の事業』（便利堂、昭和五十年）。また、生田誠氏監修『明治の京都 てのひら逍遙 便利堂美術絵はがきことはじめ』（便利堂、平成二五年）では、便利堂草創期の絵はがき印刷事業の概要を知ることができる。

(21) 図書寮文庫所蔵（函号、五〇六一四五）。平安時代から鎌倉時代に書写された取り合わせ本。かつて北畠親房が所持し、子息顕信に伝授したものであるところから「北畠本」とも称される。詳細は宮内庁書陵部編『図書寮典籍解題 歴史編』（養徳社、昭和二五年）を参照。

(22) 同会は、その後も古典籍の複製刊行を行い、昭和六年から、第二期の刊行を

はじめ、昭和一六年まで全四期にわたって三二種の古典籍の複製・刊行を行っている。

(23) 註(19) 前掲資料に綴じ込まれている。同会より図書寮に参考資料として提出されたであろう。

(24) 昭和四年刊行の『貴重図書 影本刊行会 趣意書規定及第二回配本目録』によれば、第一期の配本済書目として、承德本古謡集(一卷)、百万塔陀羅尼(一基)、長恨歌琵琶行(二冊)、法華経音訓(一冊)、寛永延宝はやり小うた(一冊)、注十疑論(二帖)、小竹集(一冊)、教長古今集註(二帖)、長崎見聞誌(二冊)、野山獄読書記(一冊)があげられている。

(25) 宮内公文書館所蔵『昭和一〇年 看聞日記領収書綴』一冊、識別番号 63573。

(26) 宮内公文書館所蔵『自昭和一〇年至同一六年 群書治要影本其他調製関係綴一』一冊、識別番号 63592。

(27) 図書寮本の疎開については、大窪太郎氏「図書寮本の疎開前後」(『書陵部紀要』三〇号、昭和五三年)が詳しい。また、大窪氏へのインタビューをもとにした田中悦子氏「図書寮本の戦時疎開について―大窪太郎氏の聞き書きをもとに―」(『記録と史料』一〇号、平成一二年)もこれを補うものである。

(28) 宮内公文書館所蔵『自昭和五年至同一八年 貴重書影本(看聞日記) 刊行予定』一冊、一一号文書、識別番号 63589。

(29) 図書寮文庫所蔵。全一卷、函号柳一二九七。

(30) 昭和六年に、貴重図書影本刊行会から佐々木信綱の解説を付して、コロタイプにより複製が刊行された『山家心中集』(図書寮文庫所蔵、一冊〔函号、五〇一―一三九〕)が、同会における図書寮所蔵図書の複製の最初と考えられる。そのため、同本の刊行が「図書寮善本叢刊」の第一とも考えられたが、同書の複製には、そのことは謳ってはいない。

(31) 便利堂『便利堂の事業』(便利堂、昭和五十年)。

(32) 現在の所管は、宮内庁三の丸尚蔵館。当時は「天子巻」のみカラーコロタイ

プで刊行した。

(33) 図書寮文庫所蔵、全三七点(宸筆三五巻、宸筆紙一枚、影写本一卷) 函号、伏一五一九。

(34) 各地の文化財レスキューについての報告は、枚挙に暇がない。また、各地でシンポジウムも開催されている。著作として、奥村弘史氏『大震災と歴史資料保存 阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』(吉川弘文館、平成二十四年)・文化財保存修復学会編『文化財の保存と修復14 災害から文化財をまもる』(クリプロ、平成二十四年)などをあげておく。またシンポジウムについては、文化庁・独立行政法人国立文化財機構主催「文化財レスキュー事業の今後を考える―東日本大震災から一年を経過して―」(平成二十四年三月二四日開催)などがある。

(35) 平成二十三年二月一日に開催された国立国会図書館主催の「第22回保存フォーラム 中国、韓国、オーストラリア、日本における資料防災：国立図書館からの報告」における、岩手県立図書館長・酒井久美子氏の発言などによる。こうした事例は数多くあると思われる。

(36) 純粋な和紙は、酸性紙問題とは無縁ではあるが、その保全は保存環境に大きく関わってくる。正倉院に伝来している律令国家において作成された膨大な文書は、千数百年にわたって伝来し続けており、未来にもその姿を伝えることができると思う。それは、和紙と墨というアナログの媒体によるからである。紙媒体資料の保存などについては、園田直子氏編『紙と本の保存科学』(岩田書院、平成二二年)などがある。

(37) 花園天皇日記研究会では、『花園院宸記』のコロタイプ複製を利用し、同記の注釈の作業を行い、以下のような成果を公刊している。

『花園天皇日記』(花園院宸記) 訓読と注釈 正和二年正月記(『花園大学国際禅楽研究所論叢』四号、平成二二年)、『花園天皇日記』(花園院宸記) 訓読と注釈 正和二年三月記(『花園大学国際禅楽研究所論叢』七号、平成二四年)、『花園天皇日記』(花園院宸記) 訓読と注釈 正和二年四月記(『花園大学国際禅楽研究所論叢』八号、平成二五年)。

図書寮・書陵部 コロタイプ複製一覧

順 番	年 度	書 名	員 数	単・多色	部数	製作会社	市 販	備 考
1	昭和6年 ～ 10年	看聞御記	43 巻	単	100 部	便利堂	貴重図書影 本行会会員 に増刷頒布	収納筆筭 2 棹付 釈文 44 冊付
2	昭和11年 ～ 16年	群書治要	47 巻	単 調点は木 版による 朱刷	80 部	大塚巧芸社		収納筆筭 1 棹付 釈文 48 冊付 釈文は合計 160 部 製作し 80 部は各 方面にも配布
3	昭和20年	中右記 天仁 2 年冬	1 巻	単	100 部	便利堂		解説付
4	昭和22年	麓木抄 上	1 冊	単	140 部	便利堂		解説付
5	昭和23年	四分律音義	1 巻	単	100 部	便利堂		解説付 (以上、図書寮による)
6	昭和24年	為兼卿和歌抄	1 冊	単	180 部	便利堂		解説付 (以下、書陵部による)
7	同	文館詞林 巻 668	1 巻	単	100 部	便利堂		解説付
8	昭和25年	類聚名義抄	1 帖	単	80 部	便利堂		解説付
9	同	冀明抄	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
10	昭和28年	水左記 康平 7 年春夏	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
	昭和30年	水左記 康平 7 年秋冬	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
11	昭和31年	むくら 3	1 冊	単	150 部	便利堂		解説付
12	同	いはてしのふ	1 冊	単	150 部	便利堂		解説付
13	昭和32年	土右記 延久元年夏	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
14	同	台記 保延 5 年夏	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
	昭和34年	台記 仁平 2 年秋	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
15	昭和33年	ささめこと	2 冊	単	200 部	便利堂		解説付
16	昭和35年	古今和歌集	1 冊	単	200 部	便利堂		解説付
17	昭和36年	比良山古人霊託	1 巻	単	200 部	便利堂		解説付
18	同	漂到流球国記	1 巻	多	200 部	便利堂		解説付
19	昭和38年	琵琶譜	1 巻	多	150 部	便利堂		解説付
20	昭和39年	御撰錄渡庄目録	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
21	昭和40年	金葉和歌集	1 冊	単	200 部	便利堂		解説付
22	昭和41年	天子撰関御影 天子巻	1 巻	多	150 部	便利堂		解説付
	昭和42年	同 撰関巻	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
	昭和43年	同 大臣巻	1 巻	単	150 部	便利堂		解説付
23	昭和44年	洛中絵図	1 鋪	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	分割図方式 解説付
24	昭和45年	平安朝往生伝集	2 冊	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
25	昭和46年	文机談	2 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
26	昭和47年	維摩講師研学豎義次第 上	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
	昭和48年	維摩講師研学豎義次第 下	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
27	昭和49年	詩序集 下	1 冊	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
28	昭和50年	春記 長暦 4 年正月	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
29	昭和51年	花園天皇宸翰集	3 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
30	昭和52年	紀家集	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
31	昭和53年	伏見天皇御集 夏部	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
32	昭和54年	知国秘鈔 上	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
	昭和55年	知国秘鈔 下	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
33	昭和56年	新夜鶴抄	1 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
34	昭和57年	桂別業図	1 鋪	多	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	分割図方式 解説付
35	昭和58年	伏見天皇宸筆御置文	2 巻	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付

36	昭和59年	椿葉記	1 卷	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
37	昭和61年	看聞日記巻 5 紙背文書	1 卷	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
38	昭和62年	梁塵秘抄口伝集巻 10	1 冊	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
39	同	為兼為相等書状並案	1 卷	単	150 部	便利堂	吉川弘文館 (150 部)	解説付
40	昭和63年	法性寺殿記	1 卷	単	150 部	便利堂	八木書店 (150 部)	解説付
41	平成元年	源經信筆 琵琶譜	1 卷	多	150 部	便利堂	八木書店 (150 部)	解説付
42	平成2年	僧慶政関係資料 法華山寺縁起	1 卷	単	150 部	便利堂	八木書店 (150 部)	解説付
43	同	僧慶政関係資料 渡宋記	1 卷	単	150 部	便利堂	八木書店 (150 部)	解説付
44	平成3年	花園院宸記 巻 1, 2, 3	3 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成4年	花園院宸記 巻 4, 5	2 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成5年	花園院宸記 巻 6	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成6年	花園院宸記 巻 7	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成7年	花園院宸記 巻 8	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成8年	花園院宸記 巻 9, 11	2 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成9年	花園院宸記 巻 10	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成10年	花園院宸記 巻 12, 13	2 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成11年	花園院宸記 巻 14, 15, 16	3 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成12年	花園院宸記 巻 17, 19	2 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成13年	花園院宸記 巻 18	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成14年	花園院宸記 巻 20	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (100 部)	解説付
	平成15年	花園院宸記 巻 21	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成16年	花園院宸記 巻 22	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成17年	花園院宸記 巻 23	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成18年	花園院宸記 巻 24, 26	2 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成19年	花園院宸記 巻 25	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成20年	花園院宸記 巻 28	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成21年	花園院宸記 巻 27	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成22年	花園院宸記 巻 29	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (55 部)	解説付
	平成23年	花園院宸記 巻 30	1 卷	多	100 部	便利堂	思文閣出版 (50 部)	解説付
	平成24年	花園院宸記 巻 31, 33	2 卷	多	85 部	便利堂	思文閣出版 (50 部)	解説付
	平成25年	花園院宸記 巻 34	1 卷	多	80 部	便利堂	思文閣出版 (50 部)	解説付